

〈書評〉

巒玉璽『青島の都市形成史：1897-1945 —市場経済の形成と展開—』

(思文閣出版、2009年)

金丸裕一

I

他者が全力を用いて執筆した成果について、僅か何ページかの「書評」という形式において論断する行為じたいに、たいへんつらいものを感じている。それは確かに、一冊に編集された図書であるかも知れぬ。しかし公刊に到るまでの歳月と、その間に生じたであろう様々なできごとに思いを馳せるならば、是とするにしても非とするにしても、評価行為そのものが持つ重さに、心が押しつぶされそうになることも屢々であった。そのうえ書評子からしてそもそも、永遠性・超越性・絶対性とは無縁の、土の器のかけらにすぎない。同業者が半生を傾けて仕上げた作品に対して、あれこれと云々する資格が、はたして与えられているのであろうか？

今回の作業では、特にその思いを強くした。なんとなれば、わたくしが平素から考えている歴史研究に必要な原理原則と本書との間に、相当な距離が存在していたからである¹⁾。かなり長い期間をかけて本書を何回も読み直し、「書評」そのものを放棄する選択を考えたこともあった。けれども、われわれ被造物の有限性を大前提としても、逃避が建設を喚起することはない。誠実で有効

1) かつて評者は本書の基礎となる一連の論文に対して、「史料批判や運用方法、さらに論証手法には若干の難点を指摘せざるを得ない」と批判したことがある(拙稿「占領期青島における電気事業」、本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済 1914-22年』財団法人東洋文庫、2006年、201頁)。結果的にこの書評は、当時から抱く違和感と疑問点の提起に重点が置かれてしまった。

な問いかけが、この作品および著者にとって最大の協力になるであろうと信じ
また祈りつつ、わたくしの感想を率直に記したいと思う。

II

この本の誕生をいつの時点であると判断するのか？ あまりにも自明の問題
に対する配慮を、今回の作業の出発点に置く必要があるだろう。その謎解き
は後述に譲り、まずは本書の構成、及びその初出年から整理してみたい。

序章 課題の意義と研究方法（書き下ろし）

第 1 章 青島の租借と都市インフラストラクチャー整備（2008 年一部再録）

第 2 章 交通機関の整備と商品流通市場の形成（2007 年）

第 3 章 貿易を中心とする商業の発展（2000 年一部再録）

第 4 章 青島近代綿紡績業の設立とその発展（1998 年一部再録）

第 5 章 青島綿紡績業の労働者構成とその管理（2001 年）

第 6 章 青島の産業発展とその構造—綿紡績以外の工業を中心に—（2004 年）

第 7 章 教育・文化施設の整備と近代教育体制の形成（2001 年）

第 8 章 山東省の経済発展と煙台・威海（2009 年一部再録）

終章 ドイツ・日本の青島進出とその都市形成（書き下ろし）

期間としては 1998 年から 2009 年にかけて執筆された個別論文が各章の骨
子となっている。また本書は出版までの途上において、「青島の都市形成とその
経済発展— 1897～1945 年の市場経済の展開を中心に—」とのタイトルで 2005
年 12 月に関西学院大学経済学研究科より博士学位を授与された論文（評者は
未見）を「修正・加筆」した成果でもあり（319 頁）、更に 2008 年度において
日本学術振興会科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け（320
頁）、2009 年 2 月に刊行された学術書である。学会誌における査読をはじめ幾
つかの関門をクリアして来た研究であり、難関として名高い日本学術振興会に
よる出版助成の審査を通過、最近では権威あるとされる学術誌においても「手
堅い実証研究」と紹介されている²⁾。

2) 荒武達朗「2009 年の歴史学界—回顧と展望—東アジア（中国—近代）」（『史学雑誌』第 119 編
第 5 号、2010 年）232 頁。

本書を貫く問題意識は、次のように総括されよう。すなわち、1898年以降はドイツの租借地、続いて1914年から1922年は第一次大戦の結果としての日本による占領、また1937年から1945年にかけては日中戦争にともなう軍事的占領と傀儡政権支配といった逆境におかれた青島で、それらは「自主的経済発展に大きなマイナスの影響を与えたと一般に評価されている」（11頁）。しかしドイツ・日本による支配はまた「資本主義の新しい生産力および多額の資本、最新の技術などを青島に持ち込み、……この変遷過程においてドイツ・日本は青島を足場として莫大な利益を獲得する一方、青島および後背地の生産関係、産業構造に大きな影響を与えるとともに、青島の経済発展および社会発展にとってもある程度の物質的な基盤を作った」（11～12頁）のである。

各章の主題はしたがって、序章で描いた枠組の検証のために設定されている。第1章におけるインフラ形成をめぐる通史的考察にはじまり、第2章における鉄道敷設・鉱山開発を契機とした商品化の展開と市場形成及び拡大、第3章における対外貿易やその担い手たる商社・海運・金融機関などによる働きの結果たる港湾都市形成など、多方面からの論述がなされる。第4章と第5章は近代中国工業史における「モノサシ」的産業の事例研究であり、加えて第6章では製粉・化学・機械・電気などの部門を検討、続く第7章では人的資本形成を考察すべく教育史にまで議論の範囲が広げられる。そして第8章において青島の事例と山東省内の煙台・威海の歴史を比較、「ドイツ・日本の青島進出」が戦前・戦時期に留まらず「戦後の青島および山東省の近代化にも寄与し、その経営理念・技術革新・技術者育成を重視する考え方は、今日も青島の近代化が速やかに進められている要因の一つである」（311頁）といった大胆な展望が提起された。終章では「ドイツ・日本の近代管理システム」と「資本と技術の導入」が果たした役割を明示（318頁）、貢献の内容がより具体的に指摘される。本書の構成そのものは、極めてオーソドックスかつ妥当であると評価できるだろう。

ちょうど本書が生まれ落ちようとしていた期間の半ばあたりから、評者も青島経済史について学ぶ機会が与えられた。たいへん恵まれた条件の下での共同研究であった故、青島・済南・台北など海外での史料調査、都内を筆頭に山

口大学や神戸大学を中心に所蔵される山東関係日本語史料の調査・発掘、国内外における先行研究の収集、また滋賀県の勤務先に在ってもインターネットを經由して良質の素材を無償提供するアジア歴史資料センターや神戸大学図書館「新聞記事文庫」の活用など、貴重な経験を重ねた日々であったと振り返る。そして国内外を問わず、偶然なことに青島史研究は 21 世紀を迎えて以降、続々と優れた研究が出現している状況を発見した³⁾。研究論文を加えたならば、新しい成果は本書と同時進行的に続々と誕生していたと表現しても過言ではあるまい⁴⁾。

理想をいうならば、序章における先行研究の整理において、これらについての批判的検討、及び自らがクリアすべきハードルの設定が、やはり欲しかったところである。それは単に当該分野に連なる先人たち/同時代を生きる同業者たちによる到達点を確認するための営為にとどまらず、史料の所在や内容を知る手掛かりになったであろうから。残念なことに、研究史整理の俎上に乗せられた論著は少ない。しかも中国の同業者によるその過半は、「中国人による日中関係史研究あるいは日中戦争史研究においては、中国人の過剰な被害意識および日本に対する特別な思い、国際法の軽視、さらに学問における民主主義の欠如などの問題があった」(12 頁)とする乱暴な総括と整合性を持つ、旧いタイプの作品であった。本書の個性的な論点たる「破壊性」と「建設性」との微妙な関係についても既に、呂明灼「徳占膠澳対近代中国的双重影響」(『文史

3) ここは網羅的目録を示す場ではないため、本書に関わって思い浮かんだ日本語・中国語の研究書に限って紹介する。張玉法『中国現代化的区域研究：山東省(1860 - 1916 年)』中央研究院近代史研究所、1982 年；劉大可『民国山東財政史』中華書局、1998 年；庄維民『近代山東市場經濟的發展』中華書局、2000 年；齋藤聖二『日独青島戦争』ゆまに書房、2001 年；《民国山東通志》編輯委員會編『民国山東通志』全 5 冊、山東文獻雜誌社、2002 年；呂偉俊等『山東区域現代化研究(1840 - 1949)』齊魯書社、2002 年；陳慈玉『日本在華煤業投資四十年』稻郷出版社、2004 年；黃尊嚴『日本与山東問題：1914 - 1923』齊魯書社、2004 年；劉大可・庄維民『日本工商資本与近代山東』社会科学文献出版社、2005 年；本庄比佐子編前掲書、2006 年；ヴォルフガング・パウワー著、天津留厚監訳『植民都市・青島 1914-1931 - 日・独・中政治經濟の結節点 -』昭和堂、2007 年など。

4) ドイツ占領期を中心とした浅田進史による独語一次史料を駆使した実証研究、青島における日本語定期刊行物の発掘と内容を分析した吉田建一郎による研究などは、やはり本書の成立過程において公表されている。

哲』第250期、1999年）において、初歩的な枠組みと考察の必要性は説かれているのである。これはしかし、先述した本書の「誕生日問題」に起因した部分も多いだろうから深い詮索は避けたいが、特に第2章を中心にたびたび論拠として引用される庄維民の単著に関しては、明確な評価を踏まえた利用が不可欠であったと思う。

III

より本質的な違和感を覚えたのは、本書における各種の実証方法についてである。紙幅の都合もあるため、ここでは数点に絞って問題を示したい。

例えば第3章は、青島の「近代化」の一指標たる港湾形成と対外貿易を考察する重要な役割を担っている。経済史研究であるから図表が活躍する場面も多く、その解説も評者に課せられた任務であろう。こうした意気込みでページを追っている途中、グラフ3-1（117頁）の時点で既に、作図が気になった。時間軸（t）の間隔が不均等なのである。同じミスはグラフ3-2AとB（120頁）においても見られた。線の傾きに変化が反映されるのであるから、これは初歩的な過ちである。しかも対米貿易額が「(19)32年に対日本の青島港貿易額を凌駕して第1位となった」（120頁）といった主張がなされるものの、罫線からその事実を窺い知ることは不可能であった。グラフ3-3A～C（131頁）も同様であり、その出典から判断すれば、1924年以前のデータは『海外旅行調査報告』（神戸高等商業学校、1924年）、それ以降は『経済時報』第16号（青島日本商工会議所、1939年）に拠るのだから、少なくとも1925年以降は同質の数値が得られ、正常な折線グラフが描けたのではなかろうか。

表3-4（123頁）についても、その作成方法には多くの謎が残る。同表は輸出入関税収入をまとめた内容であるが、依拠する史料から判断すれば、『青島全書』（1914年）によって得られた数値は1912年以前、『新刊青島要覧』（1918年）は1917年乃至1918年以前、『北支那経済開発論』（1940年）は1938年までを示すと予測がつく。別言すれば、1920年以降のデータは『北支経済開発論』にその出典を求めざるを得ないのである。しかし肝心の『北支経済開発論』310～311頁には1935年以降の数値が掲載されているのみであり、1920

年～1929 年についてはついに出典が確認できなかった。しかのみならず、表 3-4 で記載される「伸び率」について、通常の年次は対前年比で算出されているものの、1915 年・1920 年・1935 年については、単純に前欄の数値を除いて求められている（1915 年÷1912 年、1935 年÷1929 年という計算）。第 3 章という限定された箇所において、作図・作表のみを精査しても、単純なミスや第三者による検証不能箇所が頻出しているのであり、これでは読者に対して重大な不信感を与えてしまうであろう。

続いて第 4 章の検討に移る。青島近代綿工業史に関するこの章においては、民族系資本と在華日本資本との関係が論じられている。全体を通じて先行研究が恣意的に整理されているといった印象に加えて、出典不明の記述も多い。青島の立地条件を整理した部分（147～151 頁）を読んで強く感じたのであるが、時間感覚が固定的かつ静態的であり、変化というものが余り意識されていないのではなからうか。6 項目にわたり列挙される「工業立地条件」は、その大部分が戦時期における「条件」であり、20 世紀前半の各時期において構造的変化が生じたのか否かといった視点は、ここからは浮かび上がってこない。

一転して第 5 章においては、歴史のなかの変貌の観察に、ある程度は成功しているように思われた。「図表に語らせる」手続きも、違和感は少ない。これは 1930 年代以降の主題に限定した、禁欲の賜物であろうか。ただ、戦時期における青島（1939 年）と五卅事件前後における上海（1925 年）の在華紡労働者出身地の比較などは、一見すると興味深い差異が発見できるものの、他方では 1920 年代上海的な民族運動・労働運動の高揚、更に日中戦争による華北政治経済環境の激変といった地域的・歴史的背景を隠蔽させる危険性もある（182～184 頁）。労働者募集について著者は、(a) 門前募集、(b) 縁故募集、(c) 出張募集の三類型を指摘する。このようなタイプが併存したのか変容していったのかについての分析こそ、歴史研究の醍醐味であるが、(a) については 1920 年代の史料、(b) は 1940 年代の事例、(c) は 1930 年代後半のケースとまちまちであり、「門前募集を主として、縁故募集と出張募集との方式が併用されていた」（188 頁）ことは、証明できないのではなからうか。以下、労務関係に関する論述を精読するに、主に戦時下 1940 年代の史料に基づき工場組織・

労働者教育などを分析する中で（190～203頁）、時折1920年代から1930年代の素材が混入し（194頁、196頁など）、具体的事例として示される大日本紡青島大康紗廠の典拠は、全て1920年代のものであった（203～205頁）。史料と研究論文を混用し、また時空を行き来する叙述スタイルは、歴史学に相応しくない。

この他、1939年度と1940年度の出来事を1939年出版の二次史料によって「論証」するような不注意（225頁の注19。同様な箇所として86頁の注48、194頁の注32、233頁の注32、241頁の注57など）、あるいは1936年の貨幣単位を「人民元」とする不手際（198～199頁の表5－18及び19）等々、実証と推敵そのものの怠慢を指摘せざるを得ないのである。「興亜院の院長」（→総裁。54頁）、「中国紡績連合会」（→華商紗廠聯合会。86頁）、「漢米汽船」（→漢美輪船。109頁）、「満洲事件」（→事変。135頁）、「高岡博文」（→高綱。18頁）、「芝原卓自」（→拓自。323頁）、「高村隆英」（→中村。同上）、「福島園照」（→副島園照。325頁）といった誤記、固有名詞・歴史用語でドイツを示す中国語の「徳」を日本語の「独」に置換する「配慮」などに出くわす度に、複雑な気持ちになってしまった。

IV

これらの原因は、はたして何処に所在しているのか？ 最後に、その私見を述べたい。これは第8章における「ためにする」比較考察とも通底する問題であるが、本書が多用した史料そのものの中に、わたくしが指摘した「違和感」と「陥穽」の一因を見いだせると考える。

例えば、随所で利用される松崎雄二郎『北支経済開発論—山東省の再認識—』（ダイヤモンド社、1940年）は700頁を超える大著であり、日中戦争勃発以降の青島社会経済に関する百科事典的な趣すら持つ二次史料である。殆ど同じ時期に公刊された小冊子において松崎は、「北支開発の再編成と今後の施設運営に対し一層の考慮を払はれむことを切望し、天津中心論者よりすれば或は我田引水の誹りあらむも、北支経済開発の大局的観点より聊か寄与するところあら

んとして敢て青島の重要性を強調する⁵⁾と、明確にその執筆目的を語る。松崎雄二郎は 1906 年に会津で生まれた。1927 年に東亜同文書院を卒業した後、直ちに青島の日清紡績に勤務、1935 年に待遇や調査活動の禁止をめぐって宮島清次郎社長と衝突して退職、直後 29 歳の若さで青島日本商工会議所の専務理事に就任している。戦時中も商工会議所に勤務するかたわら、華北交易統制総会常務理事・山東輸出入組合聯合会理事長なども兼務、1944 年以降は山東省経済調査会理事長・華北食料平衡倉庫理事、戦後も山東省政府経済顧問・山東大学講師として留用され、復員後は会社経営を経て山梨学院大学・日本大学・北海道薬科大学の経済学担当教授を歴任した⁶⁾。要するに、『北支那経済の新動向』(大日本雄辯会講談社、1942 年)を含めて、松崎による記録は決して中立的なものではない。青島の優位性の宣伝こそが、彼に課せられた使命であった。

また本書において使われた日本語定期刊行物は、1930 年代から 1940 年代のものに偏重している。吉田建一郎による丹念な作業を通じて、『青島実業協会月報』(1918 年～1921 年)、『青島商業会議所月報』(1922 年～1923 年)、『経済週報』(1923 年～1926 年)の背景や内容・所在について判明しつつあり⁷⁾、かかる地道な仕事を継続するならば『青島港貿易概況』、『統計月報』、『経済時報』、『青島日本商工会議所所報』、『青島経済統計月報』等々、1910 年代から 1940 年代半ばに到る情報も、確実に入手できるようになるだろう。論証したい出来事と時間的距離が少ない史料を選択することが実証史学の基本たるゆえ、著者には特にこの方面での刻苦勉勵を切望する次第である。

「日中両国の資料を利用することで、客観的な立場」(14 頁)を獲得し、ニュートラルな歴史像構築が本書の課題であったと見受けられる。そうであらんとするならば尚更、依田憲家による誤訳まみれの史料集や翻訳への依存とは速やか

5) 松崎雄二郎『青島の重要性』(青島日本商工会議所、1941 年) 20 頁。

6) 松崎雄二郎『僕のぶらぶら人生』(中央公論事業出版、1983 年)を参照。

7) 吉田建一郎『『青島実業協会月報』記事目録』(『近代中国研究彙報』第 27 号、2005 年)、同『『青島実業協会月報』』『青島商業会議所月報』』『経済週報』の記事目録』(本庄比佐子編『戦前期華北実態調査の目録と解題』財団法人東洋文庫、2009 年)、同『『青島実業協会月報』解題』(神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ、2010 年作成)など。

に訣別し、史学方法論の原点に立ち返る必要性を痛感させられた。かなり手厳しい呼びかけに終始した感がある。著者のご海容を乞うとともに、その応答を衷心より希望したい。また、読者諸賢によってもこの書評に対して、忌憚なき反論が寄せられることを願っている。

擱筆する前に、自らの研究とそれを取りまく生活環境の変化を意識した時、どうしても追記しておきたい事柄がある。学生・院生、そして教員になって間もない時期あたりまでは、歴史とは進歩するものであり、その創造は他ならぬ主権者=我々の任務であると信じていた。但しこの20年余り、わたくしたちの祖国を襲来した経済的・政治的な激流に身を委ねる渦中、果たして「進歩」や「発展」の描写で満足して良いのだろうかという漠然とした不安感が、年を経るごとに次第とその輪郭をあらわにしてきたのである。これは学部生時代に履修した西洋史の講義において猛反発していたブルクハルトが述べる如き世界観・歴史観に対して、むしろ親和的感慨を抱くにいたった過程とでも表現したら良いだろうか⁸⁾。翻って本書を含めて中国の隣人たちによる歴史書では、いまなお「発展」や「成長」が数多く物語られている。これは恐らく、流行や趣味として片づくような問題ではなかろう。「懐疑」や「危機」が思考の出発点となってしまった私（あるいは私たち）と隣人との、「いま」をめぐる認識の落差とでもいうべきか。これこそがまさに、初めから終わりまで消え去ることがなかった違和感の、より根源的な理由であるのかも知れない。

8) ヤーコブ・ブルクハルト著、新井靖一訳『世界史的考察』（筑摩書房、2009年）。ちなみに評者は、仲手川良雄教授の西洋史を受講していた。